

〈研究ノート〉

## 情念に欠ける人々

津田尚子\*

Individuals affected by lack of passion

Naoko Tsuda

**要約**：Bion, W. R. は、機能の理論を用いて演繹的システムに現実化を適合させるべく精神分析を実践した。その理論の中心的な役割を果たしていないが、Bion は情念という用語を用いた。本論では、情念の定義を整理し、他の心理状態との比較で情念を明確にする。結論として、情念の欠けた状態が今日の学生に共通して観察されることに気づいた。実際の見地から見ると、学生に指導する際は情念に配慮すべきである。

**Abstract**：Wilfred R. Bion practiced psychoanalysis that attempted to match realization with the deductive system using the theory of function. Though not centrally involved in his theory of thinking, Bion used the term “passion” in his works. This paper attempts to construct a definition for passion and define conditions of lacking passion compared with another dispositions and psychological states. Consequently, lack of passion was found to be a common observation in students in modern settings. Practically, passion should be taken into consideration in instruction to students.

**Key words**：情念 passion 結合 emotional links パーソナリティ機能 personality functions 強度 intensity 学生指導 instruction to students

### I はじめに

機能理論によって精神分析を演繹的システムに合わせ、精神分析に科学としての位置を獲得しようとした Bion, W. R. の理論の中に、情念という用語がある。この言葉は、Bion の思考理論の中でも中心的な概念ではないが、「知りたい」「好き」「嫌悪する」等の情緒体験に強さを与える要素と定義されている。この情緒体験に強さを与える情念が、今日の学生の心理状態

を理解するキーワードになるのではないかと考え、情念という概念を紹介するとともに、情念を鍵概念に心理状態を解明する。情念から明らかになる心理状態の理解が学生理解に役立ち、効果的な指導に結び付けられるようにしたい。

### II 本論

#### 1. 情念の定義

情念は、ほぼ唯一『精神分析の要素』(Bion, 1999) にしか出てこない。しかも言葉が出てく

---

受付日 2016. 6. 24 / 掲載決定日 2016. 12. 12

\*関西女子短期大学 准教授

る場所は、3 箇所しかない。ひとつが第 1 章の最終段落で、二箇所目が第 3 章、三箇所目は第 8 章の最終段落である。

第 1 章では、「理性」と「観念」の表現法・定義に続いて出てくる。初出では、理性は「情念の要求を満たすための機能を表現し、それらがたとえ何であれ実在の世界において支配的になるようにする」(Bion, 1999) と書かれており、あくまで理性に付随する要件のひとつとして記述される。ただ、その指し示す内容は、理性を方向づける第一義的原動力であり、世界観を支配するという点において、必ずしも軽んじられるものではない。1 章の記述は続き、「情念によって私は、L・H・K に含まれるものすべてを意味する」(Bion, 1999) とあり、情緒的結合の種類である、L (愛する)・H (嫌悪する)・K (知る) に含まれるすべて、情緒的強さ・迫力のようなものを示唆している。

主に情念について説明されているのは第 3 章である。情念がパーソナリティの機能の要素のひとつとして定義される。この要素は、固定した刺激としてのひとつの性質ではなく、機能としての用語であり、そのある目的に従うかそれを用いるときはつねに機能であり、機能を持つものを指示する。同時に目的でもある (Bion, 1999)。情念は、感覚・神話<sup>1)</sup>とともに、パーソナリティ機能の要素のひとつに挙げられている。パーソナリティが外界を捉える際に、ある人は自分が感じた感覚を疑いもない抛り所とするように、またある人は昔からの言い伝えにその根拠を見るように、ある人には情念こそがパーソナリティ機能を動かす、疑いの余地のない根拠と見ているということがいえよう<sup>2)</sup>。

さらに、パーソナリティは情念によって、「(暴力の感覚を伴わない) 強度と暖かさともに体験される情動を表現する」(Bion, 1999) としている。L (愛する)・H (嫌悪する)・K (知る) との関係においては、「L・H・K がそこにある要素として認められるためには所有しなければならぬ諸次元のひとつ」(Bion,

1999) であるとしている。言い換えると、感情を感情たらしめる根本的な性質のなにかということになろう。同時に、感覚と異なり、「情念は二つの心が結合しており、情念がある以上心が二つ未満でありえないことの証拠である」(Bion, 1999) としている。つまり、自己完結する感覚ではなく、何かに対する情動としての情念があるということである。L (愛する) が情念を所有しているときあるもの (人) に対する熱い愛情となり、K (知る) が情念を所有すると何かについての熱心な知識欲ということになる。H (嫌悪する) が情念を有すると、あるもの (人) への強い憎悪となる。

8 章では、情念は生と死の本能との関係で述べられている。情念は理性の支配者であるが、同時に生と死の本能に支配されるという。いわば生の本能・死の本能によって情念の目的が変わってくるということになる。その際には、理性が情念を満足させるのに失敗した経験に基づき、論理の公理が必要とされるとしている。「強力な理性の存在が、欲求不満に陥り激怒した支配者たち<sup>3)</sup>の攻撃に抵抗する、理性の機能の能力を反映する」(Bion, 1999) という。欲求不満の強い存続の危機感や情動に抵抗するには、疑問をさしはさむ余地のない公理、絶対的な理性を必要とするということだ。たとえば、情念が生と結びつき理性を支配しているとき、「こつこつ地道にやっつけていけばいつか陽の目を見る」と理性を牽引しえるが、理性が満足な結果をもたらさず、死の本能の影が情念に落ちると、自己破壊的な方向に反転する。学生生活場面でいえば、自分なりにさまざまなことを犠牲にしてこつこつ積み上げてきた勉強の結果が想定外に点数にならなかった場合、科目担当者への不平・疑いのみならず、頑張ってきた自分自身の否定、さらには関係のある事柄や想起される場面をことごとく破壊してしまいたい、もしくはきれいさっぱり吹き飛ばしてしまいたい衝動に駆られてしまうということにも結びつく。そのような時に、たとえば「自分のよ

うな大人物はテストでは測れない」等根拠不明瞭ながら、なんとなく疑いも持たず鵜呑みにできそうな理屈を引っ張り出す。これを公理のように用いながら、荒れすさんだ感情という形で表現されている欲求不満に激怒した本能と情念をひとまず抑え込む。しばらく時間を置いた後、もし理性の能力を健康な程度持ち合わせている人ならば、謙虚にその事実を本質から理解し直して、根本から好転させる現実的な手段に立ち戻ることができる。このように、情念は、生の本能にも死の本能にも翻弄され、それぞれに強度と熱気を付与しながら、理性を動かしていくのである。

情念という用語は、それ以降著作では取り上げられない。それは、本来病的な思考や真実ともいえる絶対的現実化に関心があつた Bion にとって、情念にそれほどの必要と関心を持たなかったためと考えられる。

## 2. 情念に欠けている状態のさまざまな心理場面との比較

以上のことより、情念がある状態は、理性を方向付ける原動力として力を与え、L（愛する）・H（嫌悪する）・K（知る）などの情緒的連結に、強度と暖かさを体験させる状態である。

その逆が情念に欠けている状態であるとする、次のように仮定できる。情緒といえるもの、あるいは情緒の萌芽というものは存在するが、それを対象に対して向ける強度やひき寄せるエネルギーはなく、一般的な「愛する」「嫌悪する」「知る」情緒がそれらしくあるような力強さがないために、それらがあるように見える表現も十分に形成しえない状態である。それは、本人には「ある」状態と認識されているのかもしれないが、表出までには至らない。瞬間的な感覚印象の形態に留まり、本人にその状態を描写してもらおうにも「雰囲気」「気配」としか表現できない霞のような形態になっているといえるかもしれないし、焦点づけるべき情緒

の輪郭がぼやけてくるのかもしれない。

以上のことより、下記のようなイメージ図を描くことができる（図1）。情念が付与されていないと限りなく薄く、感情を向ける対象も薄くぼんやりしている。



図1 情念の欠けた状態

従来「ない」ように感じる情緒として代表的なものは、抑圧された情緒体験であった。抑圧された情緒体験を抱えている人は確かにその情緒の所在を否定し、記憶も取り出せない状態にあることがある。外傷体験や抵抗感の強い記憶を持っているときなどに典型的に表れる。しかし注意深く観察すると、「回避している」「隠されている」印象を与える。それは、ないことにしたい情緒自体が強い情緒（イメージ図では実線で表現）をとまなう体験であるとともに、それを葬り去ろうとする同等の強い圧力で抑圧しようとしているため、どこことなく拮抗した緊張感が伝わってくる（図2）。よって、情念の欠けた状態とは全体のエネルギー感で区別が可能である。

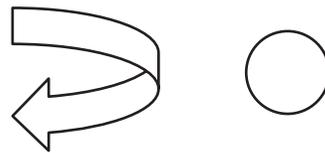


図2 抑圧された状態

情念に欠けている状態は、表現できないほどの弱さという点では、認知のあいまいな状態にも似ている。認知があいまいだと、その対象の不明瞭さのために伝えたくても表現できない。しかし、認知のあいまいさのために表現できないが伝えたい人は、往々にして、それを周囲の人に察して提示してもらいたがる。つまり、理解を共にする関係を希求し、その関係に依存し

でも了解してもらおうとする情念がある。よって、「あれ、あれじゃないか?」と周囲に察してもらいたがっている間は、情念に欠けているとはいえない(図3)。ただ、察してもらいたい存在が周囲にいなかったり、度重なる誤解のために本人が意欲を失ったりした場合、認知があいまいな上に情念に欠ける状態になるので、経過を見ていない人には認知上の不都合なのか情念の欠けた状態かは、区別はつきにくくなるかもしれない。

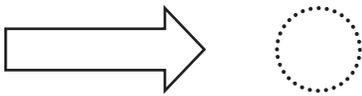


図3 認知のあいまいな状態

漠然とした認識をなかつたことのように「気のせい」だと処理することは、K(知る)のつながりへの情念を喪失しているのかもしれない。一事が万事「気のせい」と流れていると、認識する根気や楽しみの記憶が失われ、そのうち情念も枯れていくということにもなりかねない。

ほかに、自己愛の傷つきを恐れるために、外の人間関係・事柄とのつながりを極力回避する人々がいる。外界から見たら、その人はつながる情念を失っているように見えるが、本人が自分の傷つきや傷つきやすさに関心が向かっているとすると、自己対象に対するL(愛する)のつながりが強いということになる(図4)。よって、外的なことに対する興味関心は薄いかもしれないが、情念に欠ける人とはいえない。



図4 自己愛のため回避する状態

以上のような類似現象との比較検討を試みると、情念に欠けた状態は、一見紛らわしく区別が難しいが、性質を比較してみると、情念に欠

けた状態は比較現象ほどその状態が固定化していないことがわかる。その「固定化していない」を可塑性の観点から考えると、情念が付与され本人の興味関心が活発になると好適応に転じ、ほどなく通常のやりとりが可能になってくるのではないかという期待も持てる。

### 3. リンク形態別情念に欠けている状態

情念に欠ける状態を、リンクの形態から仮想場面を描写してみる。

Lに情念が不足している場面としては、愛している対象に対する愛情の温かさや強さが弱い状態といえるので、相手に対する思い入れが薄いと思えるようになる。例えば、ある教員に敬意の念を持ちつつあったとしても、その教員の立ち振る舞いの中に意にそぐわない部分を見たときに、冷風が心をよぎり「そういう人だったんだ。いい人だと思い込んでいたんだな。」とあっさりとして了解して、離れていくということが考えられる。「なぜ先生はあの時あんな言い方をしたのだろう」という疑問も、「そうする意味はあるのですか?」と相手に問いたすような行為はしない。自分の誤解だったかという確認もしない。相手に対する強い情緒がなければ、そういう手段があるとも思いつかないし、それだけのエネルギーと手間をかけてみたくも思わない。当然、敬意を取り返そうともしないし、幻想にしがみつこうもしない。

もし、自分自身へのL(愛する)が欠けているようであると、自己存在保全に関する意欲も低くなるであろう。健康で活動的な自分であろうという努力もしないし、社会的に自分を守ろうという意識も低い。よって、何か誤解に基づく行き違いが生じていても、事実確認もしない。そのまま流してしまう。他の要因も含めて本人にとって急に「致命的」が差し迫って感じられた時に、やっと「なんでわかってくれないのだろう」「受け止めてほしい」と思い訴えるだろう。

Hに情念が不足している場面では、憎しみ

も弱くなる。「嫌だったな。」「ちょっと嫌な思  
いたな」と認識しても、とことん憎しみ抜く  
エネルギーはなく、「運が悪かったのかな」「な  
かったことにしよう」「考えても気分悪くなる  
だけ」ということになる。実際に観察するところ  
では、一見大人な、否定的な感情をうまくか  
わしたりなだめたりしているように見える。ま  
れに、他の要因も含めて本人にとって急に「致  
命的」が差し迫って感じられた時に、「何てこ  
としてくれたのですか？恨みでもあるのです  
か？」と問いただしにくるだろう。

Kに情念が不足していると、知的関心が低  
くなる。「わからないからとことん理解したい」  
という情念が不足しているので、自ら探求する  
姿勢は見られない。軽く広く知識を記憶してお  
くことや検索動作が、知る活動に取って代わる  
ことになる。知るという活動は、本来、その事  
象の本質に立ち戻り、そのことを通して社会や  
世界の成り立ちを知ることである。その過程に  
は真実に触れた情緒的な動きを伴う。その感動  
は生きている意義と直結するので、学ぶ意欲を  
刺激する。一度体感すると、それを再度得よう  
として次の学びの関心や意欲につながる。そし  
て、教員はその体験に触れてそこから何かを学  
んでほしいと思っている。これが理性によって  
情念が満たされるひとつの場面だからである。  
しかし、情念の希薄さはこの知る活動に対する  
意欲や根気を持続させない。根気がすぐに尽き  
そうになるので、簡単に対処できる手法を教え  
てもらい、道程とゴールを保証してもらえたの  
ならば、不安や困難感など感じずこつこつ暗記  
に従事することはできる。不安や困難を感じさ  
せられることは学修の本質的な体験とは思え  
ず、教え方のミスであると認識されており、不  
安を感じさせられるような場面は、自分に向け  
られた意図的な悪意のように感じられる。

### Ⅲ 考 察

以上、情念が Bion によってどのように定義  
されているのか、類似現象との比較で情念が欠

けた状態とはどのような心理状態であるか、リ  
ンクの形態別で情念が欠けた状態が学生にどの  
ように現れる可能性があるのかを示してきた。  
これらの明確化を通して、やはり今日の学生の  
心理状態を理解するのに、情念という用語は有  
用であり、「情念の欠けた状態である」と学生  
を見ることによってより実態に近い学生理解が  
期待できると考えられる。

近年、学生指導で感じる困難性はその反応性  
である。質問を振っても反応が薄い。よくある  
質問は「〇〇ってどういうことですか？」「〇  
〇じゃだめなんですか？」というように、唐突  
で思考プロセスが見えない、良いか悪いか、労  
力を要することが得か無駄かの結論だけ引き出  
そうとするように感じられる、というものであ  
る。

この状態を情念の欠けた状態という観点から  
見てみる。情念は対象との情緒的連結に強度と  
温かさを付与するものであるから、情念が欠け  
た状態とは「愛する」「憎悪する」「知る」強さ  
や温かさに欠けたものであるといえる。ひと  
つ、知るという心的活動に対しても強さや熱意  
がないのだから、ものごとを捉える心がウォー  
ミングアップしていないことになる。例えば、  
何人かの学生がそうそうと合意し合いながら語  
る話では、下記のようなことになっているらし  
い。授業で教員から質問を振られても、まだ授  
業参加者として覚醒状態にはなっていない学生  
は、まず質問を振られた当事者であるという認  
識に至るのに若干時間を有する。当事者として  
考え出したころには、先生がしびれを切らして  
他の人に振ってしまっている。そしてたちまち  
先生が自分で答えを出してしまっていて、次の  
話に移っている。自分は置き去りになったま  
ま、間違った回答をして恥をかかなくてよかつ  
たと思う一方で、頑張っただけでも受け取  
ろうとしないのならいいや、というあきらめの  
境地になるというのだ。「なんか調子狂った」  
という思いで乱れた自分のコンディションを整  
えているうちに、外では次々と話が展開してい

て、再度関心を向けかけた時には話が了解できなくなっている。さらに授業に参加する意欲が低下していく。しばらくはそのままやり過ごす、試験などのどうにかしないといけない終着点が見えてくると、わけのわからない混乱と不安で、安心できる必要十分で端的な了解を入手しないと挽回できない気持ちでいっぱいになる。話題にすべき内容対象が消失しかかっている中で、自分自身の持ち得るエネルギーを精一杯高めて頑張っている質問をすると、言葉足らずのために、飛び出す言葉は上記のような思考過程の見えない唐突な質問になってしまう、ということらしい。

数人の発言を全員に当てはめるのは危険かもしれないが、一つの見解として参考になる。教員は、答えない学生に対して「わからない」「(意思として) やる気のない」という枠で評価する傾向があるのではないだろうか。その先入観の先で、情念を知的好奇心に込めにくい学生が、戸惑いあきらめている。そういうすれ違い関係を作ってしまったともいえる。ここで配慮すべき点は、情念の充てん段階という前段階があるということである。授業に来ている限りは、決して授業の価値を否定していない。ただ、好き嫌いにしても知的好奇心にしても、その充てん過程は、自分という存在に光を当てられた時に本格的にスタートする。自分に注意関心を向けられたことが、ものごとに興味関心を向ける自分のエンジンを温めるスイッチになる。今日車でも止まるとアイドリング状態ではなくエンジンから止まるが、学生の興味関心もちょっと逸れたら、エンジンの掛け直しから必要なかもしれない。それぐらいの気持ちで間を取る配慮が必要なのだろう。もし、学生がそれでもすぐに答えられない場合は「そこは大事なところだと思うから、引き続き考えておいて」など「要注意」「要関心」のマーキングをしておくことは、形あるものを今提示しなくてもいい免責にもなり、思考過程を当座保留しておけばよい目印になる。いくら促しても返事が

返ってこないからといって、「能力がない」「意欲がない」と決めつけてしまうことは、彼らなりのペースで興味関心を掻き立てて、つながりつつある学生の手を払ってしまうことになってしまう。Bion が、3章で、L・H・K がそこにある要素として認められるためには所有しなければならぬ諸次元のひとつとして、情緒的結合そのものがそれ自体で強さや温かさをも持っているように定義するのではなく、情緒的結合に情念が充てんされていくように定義づけた意義がここにあると思われる。

Bion は、8章で理性が情念を満たすのに失敗した時について述べていた。このことは、情念を想定するならば、学生の場合でも起こりうることだと考えておくべきである。勉強や実習体験等では、必ずしも努力したことが確実に結果に結びつくとは限らない。未経験のことや経験不足もあり、行き違いや理解不能は当然起こってくる。そのときの不快な思いから、死の本能のような破壊的な方向に振り切ってしまう可能性があるのである。具体的に例をあげると、本人もしようとは思わなかった過失により重大な結果をもたらすかもしれない事態(学則に抵触、もしくは卒業・資格取得に支障が出たときなど)に陥ってしまったときに、実は深く考えたこともない「もうどうでもいいです」「辞めたい」「死にたい」といった思い切った発言が口をついて出てしまう可能性があるということだ。本人の方としては、意思表示主体としての自分を保全したいあまり、相手が二の句が継げないような圧倒的な言葉でもって、自分と場を鎮めようとしている。「辞めたら関係なくなるでしょう」と翻訳できそうな発言は、公理と同じ役割を果たす。反論の余地を与えない空間に自分を置き、まず自分のコンディションを整えたい必要に駆られているのだ。その手段として用いた言葉が、それ自体別の波紋や憶測、誤解をたちまちに招くことなど視野にあるはずもない。よって、ここで教員の方が気を付けないといけない配慮は、発言を文字通りとって、強く

説得したり手続きを提示したりしないことである。本人も実はそれほどのつもりでなかったのに話が先に進んでしまい、思わず口走っただけの「辞める」自分から抜けられなくなってしまう可能性があるからである。教員としては「本人も事態を受け止め損なって、情念が破壊的な方に振り切れてしまったのかもしれない」という仮説をさしはさんでみるとよい。本人の理性の健康さを信じて、自分で行き過ぎを是正しようとするチャンスを残しておくことで、事態を本人が意図しない方向でいたずらに複雑にしないで済ますことができる。

以上、Bion の情念という概念を用いて、今日の学生の心理状況について理解を寄せてみた。これらの仮説が学生の実態と合致しているとしたら、学生にかかわる人々は知らないうちに余分な誤解を学生に抱いてしまったことになる。学生の意欲が低い、わかっているという評価とその評価に基づく対応がたとえ適切

なものだったとしても、その場に臨む情念の強弱・温度差で、展開いかんによっては退学等継続関係の放棄という大きな人間関係上の溝に発展してしまいかねない。

学生の性質は時ともにさらに変容し、まもなくこの理解が及ばなくなっていくことになろうが、本論は学生気質の変遷の一時期の描写として、当面の間有用であると考えられる。

#### 注

- 1) ギリシャ神話などの特定の神話ではなく、意味が文脈をもった、いわゆるストーリーのこと。
- 2) 日常会話の「思い」のようなものか。
- 3) 原本の文脈より、「支配者たち」は生と死の本能と情念などのことを指す。

#### 引用文献・参考文献

- Bion, W. R. 1999『精神分析の要素』（ビオン、ウィルフレッド・ルプレヒト著福本修訳『精神分析の方法Ⅰ〈セブン・サーヴァンツ〉』初版第1刷、法政大学出版局、117～212頁収録）